

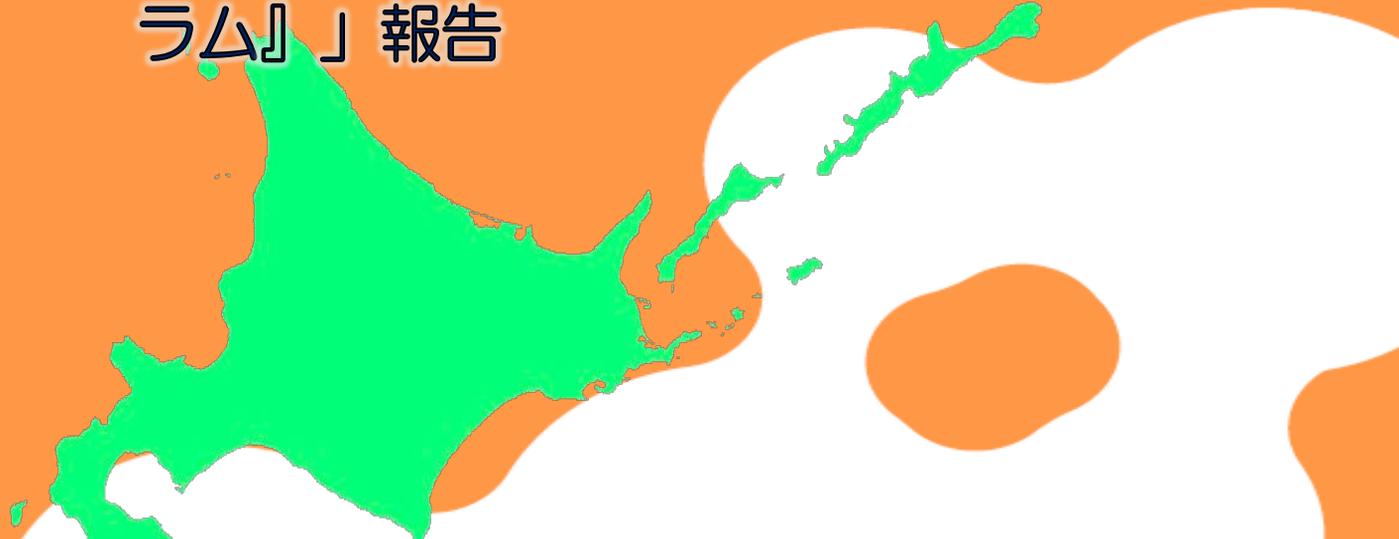
第28号  
(通巻第72号)  
令和5年(2023年)3月

# 特別支援教育 ほっかいどう

Journal of Special Needs Education in HOKKAIDO

## 特 集

- ①新しい時代の特別支援教育の充実に向けた特別支援学校の取組
- ②道内の特別支援教育におけるICTの活用
- ③令和3年度 筑波大学特別支援教育連携推進グループ「現職教員研修『専門性向上プログラム』」報告

A stylized map of Hokkaido, Japan, rendered in a vibrant green color. The map is positioned in the lower-left quadrant of the page, partially overlapping a large, abstract white shape that resembles a cloud or a splash. The background of the entire page is a solid, warm orange color.

北海道立特別支援教育センター

# 特別支援教育ほっかいどう第28号

(通巻第72号)

巻頭言

○ 「特別支援教育ほっかいどう」第28号の発刊にあたり

北海道立特別支援教育センター所長 今井章文…P1

## 新しい時代の特別支援教育の充実に向けた 特別支援学校の取組

特集①

～働き方改革「e-Smileプロジェクト」の取組～

北海道北見支援学校長 菅原靖博…P2

## ・道内の特別支援学級及び通級による指導における ICT活用実践

特集②-1

1 千歳市立北進小中学校の取組……………P8

実践事例提供協力者

- ・小学部 教諭 益山友和、鷲頭未和
- ・中学部 教諭 齋藤育、高見澤駿
- ・通級担当教諭 藤谷健太郎、山内由加里

## ・道内の特別支援学校におけるICT活用実践

特集②-2

2 北海道室蘭養護学校の取組……………P10

実践事例提供協力者

- ・小学部 教諭 宮崎満智子、高辻賢司
- ・中学部 教諭 駒澤綾子、加渡元章
- ・高等部 教諭 渡部佳穂里、池田里奈

## 令和3年度 筑波大学特別支援教育連携推進グループ 現職教員研修「専門性向上プログラム」について

特集③

北海道小樽高等支援学校教諭 小谷明日香…P12

## 〈巻頭言〉

### 「特別支援教育ほっかいどう」第28号の発刊にあたり

北海道立特別支援教育センター  
所長 今井章文



本年8月に文部科学省から告示された「公立の小学校等の校長及び教員としての資質の向上に関する指標の策定に関する指針」では、教員に共通的に求められる資質の具体的内容として、特別な配慮や支援を必要とする子供への対応、ICTや情報・教育データの利活用などが示され、教員には、技術の発達や新たなニーズなど特別支援教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、子供一人一人の学びを最大限に引き出し、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての役割を果たすことが求められています。

その一方で、同省は、教員が自らの授業を磨きつつ、日々の生活の質や教職人生を豊かにして人間性や創造性を高め、効果的な教育活動を行えるようになることを目的とした「働き方改革」を進めており、各学校は、教員が置かれる環境が大きく変化していることを踏まえて日々の取組を推進していくことが必要となります。

例年、当センターでは、本道の特別支援教育のより一層の理解と推進に向け、道内の特別支援教育における先進的な取組を発信するために本誌を発行しております。本号では、先に述べた学校や教員に求められている「働き方改革」、「ICT活用」及び「教員の専門性向上」の3つの内容について特集を組みました。

1つ目の「働き方改革」としては、道教委が作成した「北海道の学校における働き方改革手引『Road』」を活用し、働き方改革の実現に向けた取組が各学校で推進されていることを踏まえ、本号①において北海道北見支援学校の独自の取組である「e-Smileプロジェクト」について紹介し、本道の特別支援学校における「働き方改革」の推進に向けて参考となる記事を掲載しています。

2つ目の「ICT活用」としては、全ての教員がICTの活用の意義を理解し、授業や校務等にICTを効果的に活用するとともに、児童生徒等の情報活用能力（情報モラル等を含む。）を育成するために授業実践等を行うことや、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を図るため、児童生徒等の学習の改善に向け、教育データを適切に活用するよう推進されていることを踏まえ、本号②において、北海道室蘭養護学校及び千歳市立北進小中学校におけるICTを活用した授業改善の実践事例について紹介し、特別支援教育におけるICT活用の充実に向けて参考となる記事を掲載しています。

3つ目の「教員の専門性向上」としては、「新たな教師の学びの姿」の実現に向け、高度な専門職である教員が、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努める義務を負っており、学び続ける存在であることが社会から期待されていることを踏まえ、本号③において、筑波大学特別支援教育連携推進グループ「現職教員研修『専門性向上プログラム』」の研究成果と課題等を紹介し、本道の特別支援教育を担う人材育成に向けて参考となる記事を掲載しています。

「令和の日本型学校教育」の実現に向け、先生方一人一人が、教職人生を通じて探求心を持ちつつ自立かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、自らの専門性を高め、資質の向上を図ることが大切となります。

また、一人一人の教員のみでは学校現場が抱える多くの課題を解決することは困難であることを踏まえ、多様な専門性を有する質の高い教員集団を形成し、組織の力で一人一人の子供と向き合っていくことが必要となります。

本号を皆さんの勤務する学校における取組を振り返る契機にさせていただき、今後の実践の充実にお役立ていただければ幸いです。

なお、本号からの新たな取組として、全ての記事を冊子版ではなく電子版により当センターのWebページに特集ごとに順次、掲載します。又、一部の取組等について、関連する学校の管理職員や先生方へのインタビュー動画を、当センターの「特別支援教育YouTubeチャンネル」で公開いたしますので、併せて御覧ください。

## 〈特集〉

# 新しい時代の特別支援教育の充実に向けた特別支援学校の取組 (働き方改革「e-Smile プロジェクト」の取組)



北海道北見支援学校長 菅原 靖博

## はじめに

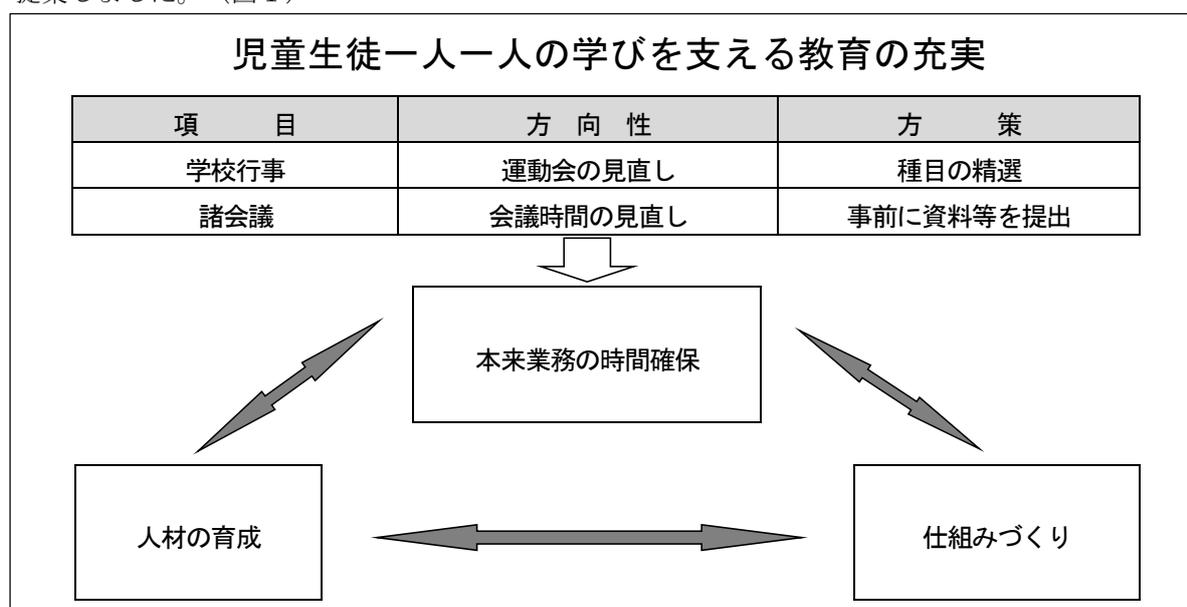
令和3年4月に校長として着任し、重責を日増しに感じるとともに、慌ただしい日々を送っていました。6月中旬、「道立学校の教育職員に係る時間外在校等時間（第4四半期）について」の通知（以下「時間外在校等時間通知」という。）がありました。本通知の添付資料「（北見支援学校）教育職員の時間外在校等時間の推移（学校個票）」を確認したところ、思いもよらぬ結果が記されていました。そこには、一人当たりの時間外在校等時間（超過時間）の推移が示されており、令和2年度の全道順位（校種別）は、4月を除く11か月間の全ての月において、10位以内であり、3位以内に7か月間という状況でした。従来より働き方改革の必要性は感じていましたが、正直なところ漠然と取り組んでいた私にとって、本校の現状は衝撃的でした。本校の働き方改革の取組は、この通知から始まったと言えます。

## 1 本校の働き方改革について

本校の働き方改革は、令和3年7月の職員会議で行った、時間外在校等時間通知の説明から始まりました。このときに感じたことは、働き方改革における、教職員個々の価値観が違うということでした。そのため、まず教職員個々の意識や考え方を共有した後、チーム（組織）として働き方改革に向けての取組の方向性を示すため、方策の検討を行いました。

### (1) 働き方改革プロジェクト（令和3年9月）

人事評価シートの面談や教職員との対話を通して、本校の教職員は、児童生徒及び保護者に寄り添った教育活動を大切にしている中、日常の業務や新型コロナウイルス感染症の対策等業務が多岐にわたっていることが分かりました。そこで、従来本校が取り組んできた働き方改革を検証し、今後の推進策として、「働き方改革推進プロジェクト」（以下「プロジェクト」という。）を提案しました。（図1）



【図1：プロジェクトのイメージ】

## ア プロジェクトの柱

プロジェクトの柱は、仕事の仕分けと効率的に仕事ができる仕組みづくりとしました。仕組みづくりは時間を要しますが、コアチーム（働き方改革推進委員会）を設け、効率よく一定の質を保つことができる仕組みをつくることで、働き方改革の目的である「児童生徒一人一人の学びを支える教育の充実」につながるということについて説明し、協力を求めました。（図2）

※コアチームは、推進チームとe-Cafeチームで形成されています。

- ・推進チーム：基本メンバーは定めるが、協議事項に応じてメンバーを招集する。
- ・e-Cafeチーム：テーマに応じて、若手教員を中心に参加を呼びかける。

### KEY POINT 仕組みづくり（SHIKUMI.PT）

働き方改革を推進するためには、「教員がしなくてもよい仕事」を仕分けるとともに、「教員がしなければならない仕事」をいかに効率よく進めるかがポイントです。

仕組みづくりは時間を要しますが、組織と個人が力を合わせて、効率よく一定の質を保つことができる仕組みをつくることで働き方改革の目的である「児童生徒一人一人の学びを支える教育の充実」を目指していきます。

【図2：働き方改革推進プロジェクト（一部抜粋）】

「プロジェクトの柱」についてのインタビュー動画はこちら

URL [https://youtu.be/0ZTUtwiz8\\_w](https://youtu.be/0ZTUtwiz8_w)



## イ 成果と課題

成果としては、本校における、これまでの働き方改革の取組を検証し、現状を把握できたことであり、その後の業務整理に役立てました。課題として、「教職員の意識改革を図り、意識や考え方の共有を図ること」、「教職員の働き方改革による業務の負担増」、「時短ハラスメント等の不安要素の解消」、「働き方改革を推進するための更なる取組の検討」が挙げられました。

### (2) 働き方改革「e-Smileプロジェクト」（令和4年2月）の立案

働き方改革に係る教職員との対話の中で、取組を進めることが必要とする意見や、取組を具体的に示す必要がある等、様々な意見がありました。次年度の学校経営方針を示す時期であったため、働き方改革は、次年度の学校経営上中心的な課題であると判断をし、先の働き方改革推進プロジェクトの成果と課題を踏まえ、働き方改革「e-Smileプロジェクト」（以下「eスマ」という。）を作成し、校長の方針を教職員に示しました。

## 2 本校における「eスマ」の取組の成果と課題について

### (1) eスマの経緯

令和4年度グランドデザイン（学校経営方針）では、将来を見据えたチーム（組織）づくりを通して、学校力を高めていくことを説明しました。本校の伝統を守りつつ、新たなことへ挑戦するという考えを示し、目指す学校像を「個人の力量をチーム（組織）力へ」と示しました。また、世代交代を計画的・段階的に行い、ミドルリーダーを中心としたチーム（組織）づくりを目指すことも明らかにしました。

教職員は、「学校を変えるチャンス」と捉え、学校経営上、働き方改革は必要であるとの理解が得られました。eスマは、「ピンチはチャンス」という思いから始まり、教職員とともに試行錯誤しながら前期（6か月）の取組を行いました。

現在のeスマの進捗状況は、コアチーム（働き方改革推進委員会）と各学部及び分掌等が連携し、本年度の反省を行っているところですが、教職員の意識の変化を大いに感じています。もちろん、様々な意見はありますが、教職員が真摯にeスマと向き合い、取り組んでくれていることに成果を感じています。（図3）

(2) eスマの特長

ア 仮説に基づき推進する

■ 基本的な考え（仮説）

限られた職員数・時間を効果的に使う手段をチーム（組織と個人）で考え、計画的、段階的に実践することが学校課題の解決につながり、結果、働き方改革を進めることになる。

イ 4つのステップ

■ ステップ1「やめる」

各学部・分掌・学習形態等で効果が低い業務、成果が得られていない業務や学習活動等は、学部主事、分掌長及び学年主任等の判断でやめる。

■ ステップ2「工夫・改善する」

年度末反省、学校評価及び面談等での学校課題の中から、工夫・改善することができそうなことから工夫・改善を始める。

■ ステップ3「方策を検討する」

各学部・分掌等で判断できない業務や学校全体に係る事項については、計画的・段階的に検討や調整を行う。「働き方改革推進委員会」（令和4年度から2か年計画）

■ ステップ4「元に戻す」

働き方改革につながると判断し、実施したが、効果的ではなかった場合は、ステップ3で検討後、改善前に戻す。



【図3：本校における働き方改革「e-Smile プロジェクト」の歩み】

eスマの特長「4つのステップ」についてのインタビュー動画はこちら  
 URL <https://youtu.be/yHK9H4boUW8>

### (3) 成果（令和4年10月）

#### ア 教職員の意識の変化

教職員はeスマを肯定的に捉え、仮説に基づき取り組んでいることから、eスマの4つのステップが浸透してきたと感じています。また、働き方改革の推進において、対話の重要性を感じたことから、現在も継続して、校長室を教職員同士の対話の場としたe-Cafeをオープンしています。

（写真1：e-Cafeの様子）

「e-Cafe」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/2qNjwMIPESM>



#### イ 時間の有効活用

会議をルール化し、効率的に行えるよう取り組んでいます。職員会議及び職員朝会の時間を見直し、管理職打合せも勤務時間内に週1回（毎週月曜日）としました。

#### ウ 定時退勤日等の定着

定時退勤日をリフレッシュの日として、金曜日や連休前に設け、会議を設定しない（休憩後の会議はしない）ことをルール化し、職員室の施錠時間を定めるとともに、形骸化しないような働き掛けをしています。

#### エ 地域連携研修の推進

働き方改革の目的は、教員が質の高い授業や指導を行うための環境づくりと考え、働き方改革の一環として地域連携研修を行っています。コロナ禍の学校生活や時代に即した学習活動をチーム（組織）として考える貴重な機会となっています。（写真2：地域連携研修会の様子）

#### オ 業務及びPTA活動の見直し・検討

PTA活動の見直し等を行い、できるところから改善しています。今、時代に求められるPTA活動とは何かをテーマに、PTA会長及び役員と新たな試みについて検討しています。

「PTA活動」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/iJ-kUI0o8TY>



#### カ ICTの活用

令和3年度の学校評価にメール配信サービス（楽メ）を活用し実施したところ、担当者の大きな業務縮減につながる結果となりました。ICTの活用は、働き方改革を推進する上で効果的なツールになることが分かりました。

「ICTの活用」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/5Gqtn8SB85I>



【写真1：e-Cafeの様子】



【写真2：地域連携研修会の様子】

#### (4) 課題

##### ア ゴールはカリキュラム・マネジメント

働き方改革の推進は、将来の学校像を見据えていることから、カリキュラム・マネジメントに係る課題と同様に解決を図る必要があると考えます。

##### イ 教職員意識の格差

働き方改革の意識・理解に依然として差が見られるため、チーム（組織）力の向上と対話の機会を通して、改善を図る必要があると考えます。

##### ウ 成果の可視化

成果が分かるように見える化する等、組織と個人が達成感を共有できる示し方を検討する必要があると考えます。

##### エ コアチームの機能強化

特別委員会の構成員と重複しないようチーム（組織）を構成したため、コアチーム（働き方改革推進委員会）の機能が発揮できるよう人数やメンバー等を再構築する必要があると考えます。

##### オ ICTの活用

メール配信サービス（楽メ）の有効活用をはじめ、Googlefoamsなどの自動集計等の使用による働き方改革に係る参考事例が国や道においても紹介されているため、今後さらなる活用方法を検討し試行的な導入を図る必要があると考えます。

##### カ 教頭の働き方改革

チーム（組織）づくりを通して、教頭が担っている業務のうち、分掌でできる業務を探るとともに人材（ミドルリーダー）の育成や体制づくりを行うことが必要であると考えます。

### 3 新しい時代の特別支援教育の充実に向けた働き方改革の今後の展望

#### (1) 働き方改革の推進は「必須」

働き方改革は、今後の学校教育の推進及び学校経営には欠かすことのできない取組であると考えます。これまでの概念や学校風土（文化）を見直し、時代が求める持続可能な体制づくりと人材育成を行う必要があります。この機会を「学校を変えるチャンス」と捉え、5年・10年後の学校像を見据えた学校づくりに取り組むには、働き方改革は必須です。

#### (2) カリキュラム・マネジメントの推進は「対話」と「協働」

令和の日本型学校教育（以下「日本型学校教育」という。）を推進するに当たり、観点別評価やICT教育の推進等、これまでの概念や発想を超える新たな取組が求められ、教職員の負担感は増しています。これらの取組を特定の校務分掌や教職員のみが担当するのではなく、働き方改革の「対話」と「協働」という視点を通して、組織と個人の力を融合した持続可能な授業設計とカリキュラム・マネジメントを両立することが、働き方改革の目的である教育の質の向上に結びつくと考えます。

#### (3) コミュニティ・スクールの推進は「働き方改革の視点」

学校運営協議会を設立する段階から地学協働を意識し、地域とともに創る学校を目指すことが、働き方改革の一助になると考えています。令和の日本型学校教育の推進には、保護者や地域の方々の理解と協力が欠かせませんが、保護者の方も共働きが多いことを踏まえ、お互いの負担を少なくするといった視点をもつ一方で、教育活動の質を高める発想と工夫が必要となります。コミュニティ・スクールを通して、保護者の方や地域の方々と一緒に教育活動や学校課題を考え、解決できる関係づくりが、結果として働き方改革の推進につながると考えています。

#### (4) 働き方改革の推進は「デジタルトランスフォーメーションの視点」

令和の日本型学校教育の推進には、GIGAスクール構想が柱となっていることから、ICT教育の推進も必須です。また、ICT機器の利活用は働き方改革の推進に効果的なツールとなります。令和の時代となり、社会全体の構造が変化中、これまでの概念や学校風土（文化）を見直し、デジタルトランスフォーメーションの視点で全ての仕組みを効率的に行う意識と実践が求められています。

#### (5) 働き方改革は「校長の決意と覚悟、リーダーシップ」

私は、現在、高齢化と人口減が進む中、学校の職場環境等の不安等から教員志願者が減少していることに危機感をもっています。業務の効率化を図るためには、新たな発想でできることから挑戦し、持続可能な教育活動を展開する必要性を強く感じています。繰り返しますが、働き方改革の推進は必須です。全ての教職員がより豊かな人生を送るため、校長はビジョンをもって対話と協働に努めるとともに、方針や具体的な方策を示すことが、教職員の安心につながると考えます。また、リーダーシップは必要ですが、教職員への気配りも大切です。

#### 4 おわりに

eスマに取り組む前は、働き方改革の真意が理解できていなく、学校経営における優先順位も高くはありませんでした。しかし、eスマに基づき、働き方改革推進校として取り組んだところ、働き方改革の推進は、学校課題の解決に直結することが分かってきました。児童生徒を取り巻く社会情勢が著しく変化し、先の見えにくい時代ですが、本稿が今後の特別支援教育における働き方改革について考える一助となれば幸いです。

「おわりに」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/8xcDaYiLTdk>



#### 講評「グッドコンディション、ハイパフォーマンス」

北海道立特別支援教育センター所長 今井章文

教師一人一人が、日々の生活の質や教職人生を豊かにし、人間性や創造性を高めることは、より効果的な教育活動につながります。更に、教師という職の魅力が向上し、教師を志す者の広がりによって、教育全体の質の底上げや持続につながっていきます。働き方改革は、北海道の教育の質の向上のために取り組むものと言えます。

働き方改革を進める上で、学校が全ての教職員に対して魅力のある職場であることが大切であり、教職員にとって魅力のある職場となるよう職場づくりを進めることが働き方改革につながると考えます。

では、魅力のある職場とは、どのような職場でしょう。魅力のある職場は、教職員が学ぶ風土があり、自身の成長を予感することができる職場であると考えます。「魅力のある職場」と感じている教職員は、本事例にある北海道北見支援学校のように、学ぶ意欲が高まるとともに、対話を通して協働が進むと感じました。

働き方改革を進める中では、管理職が教職員の「コンディション」が整うよう働き掛けるとともに、教職員も自らの「コンディション」に気付き、よくするとともに、学校全体の雰囲気や風土をよくしていくことが大切です。このようなよい雰囲気の中で自身のパフォーマンスを発揮することが働き方改革を進めていく上で、重要な視点ではないでしょうか。

管理職と教職員が一体となった魅力のある学校づくりを進めるとともに、教職員とその家族が「よいコンディションを維持し、教職員が高いパフォーマンス」を発揮した状態で働き方改革を推進することが重要です。

「講評」についての動画はこちら

URL <https://youtu.be/vfhKMIQ3HEQ>



## 〈特集〉

# 道内の特別支援学級及び通級による指導におけるICT活用実践

## 千歳市立北進小中学校の取組 (校長 野澤 孝志)

### はじめに

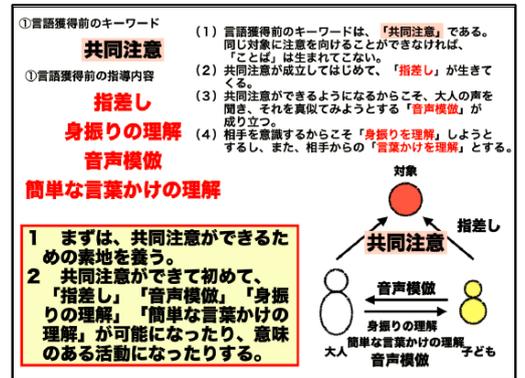
本校は、昭和35年4月に千歳市立千歳小学校の特殊学級として誕生し、町内の児童会館内で授業を開始しました。昭和37年には千歳市立千歳中学校特殊学級も併設され、昭和38年現在地（千歳市北栄1丁目2番6号）に新校舎が完成し、独立校舎を持つ全国的にも珍しい特殊学級となりました。そして、昭和46年に独立校に昇格し、千歳市立北進小学校・千歳市立北進中学校となりました。

以来、特別支援学級（平成19年4月1日、特殊学級から名称変更）のみの学校として、障がいのある児童生徒の自立と社会参加を目指し、保護者、地域及び関係機関との連携のもと、小中9年間の学びを大切にしている教育活動を進めています。

### 1 研究の概要

本校では、「自己表現の力を育成する授業づくり～ICTの活用の可能性を探る～」を研究主題として、校内研究に取り組んでいます。

令和3年度までの研究の中で、発達段階に応じた指導の「システム化」、指導項目に対応した「フォーマット」作りに取り組んできたことを活かし授業改善を図るとともに、ICTを授業に取り入れるだけではなく、目標達成のために有効であったか、児童生徒の発達段階に結び付いた活用であったかについて検証しました。



【発達段階別の指導のシステム化（一部）】

| 1 授業の流れ というフォーマットとは                   |                    |  |
|---------------------------------------|--------------------|--|
| 同じ授業の流れにすることで、子供たちが安心して授業に参加することができる。 |                    |  |
| 次                                     | 時数                 | 主な学習活動・内容  |
| 1                                     | 6時間<br>本時<br>(6/6) | 1 「おはなしできるかな」 お出かけ編を読み取る<br>2 どんどこどこに行ったことがあるかを思い出す<br>3 どんどこどこに行ったことがあるかを伝える<br>4 「おはなしできるかな」 料理編を読み取る<br>5 どんどこ料理をしたことがあるかを思い出す<br>6 どんどこ料理をしたことがあるかを伝える |

【「フォーマット」（一部）】

本校の令和4年度の重点目標「自分の考えをもち、表現しようとする子どもの育成～『担い』『認め合う』ことで培う自己有用感」を踏まえ、児童生徒がこれまで培ってきた力を表現する一つの方法として、授業や日常生活の中でICTを活用していけるよう取り組んでいます。

本校の研究に係り、北海道立特別支援教育センター、千歳市教育委員会ICTサポーター及び石狩教育局義務教育指導班等との連携の下、「ICTの効果的な活用について」、「他校におけるタブレット活用について」をテーマにした理論研修の開催、全教員による研究授業・授業公開等の実践交流を通して研究を推進しています。



【研究授業・授業公開の様子】

## 2 ICTの効果的な活用を図る研究の取組

本校の研究では、「授業・活用実践シート」を活用し、全教員が一人1事例を持ち寄り実践交流を行っています。実践交流を行うことによって、新たなICT活用の方法を発見したり、相互に教え合ったりしながら、教員のICT活用能力を高めていくことができました。さらに「授業・活用実践シート」に授業の内容の要点を記載することにより、「学習の振り返りにおける言語活動」や「共同編集を活用した協働的な学び」を意識した授業づくりをすることもできました。

| 想定される学習内容         | ステージⅠ   | ステージⅡ   | ステージⅢ                                |
|-------------------|---|---|--------------------------------------|
| 情報手段に慣れ親しませる      | ・ 支援を受けながらのログインとシャットダウン<br>・ 画面をタッチする<br>・ 充電<br>・ 写真や動画を見る | ・ タッチパッドを使う<br>・ QRコードを使ってのログイン、シャットダウン<br>・ QRコードを読み取る | ・ 指示されたアプリケーションの選択と操作                |
| キーボードなどによる文字の入力   | ・ 音声入力<br>・ (支援者による) 代理入力                                   |   | ・ 手書き入力<br>・ かな入力                    |
| 電子ファイルの呼び出し・保存・整理 | ・ 支援を受けながら、アクセスしたファイルの自動保存                                  | ・ 支援を受けながら、Google Classroom内からファイルの呼び出し                 | ・ ドライブ内にあるファイルの確認                    |
| インターネット上の情報の閲覧など  | ・ 画面上に表示されたサイトの閲覧   | ・ 画面上に表示された情報をタッチして好きなページへwebページ移動                      | ・ 画面上に表示された情報をタッチして指示されたページへwebページ移動 |

【千歳市立北進小中学校情報活用能力の体系表の一部】

北海道立特別支援教育センターの所員が、学校を訪問し取材した実践事例について、こちらから紹介します。

### 実践事例提供協力者

- ・ 小学部 教諭 益山友和、鷲頭未和
- ・ 中学部 教諭 齋藤育、高見澤駿
- ・ 通級担当教諭 藤谷健太郎、山内由加里

URL : [http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/?page\\_id=1075](http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=1075)

|                       |  |
|-----------------------|--|
| 名前                    | 齋藤 育   |
| 対象児童生徒                | 中学部 国語齋藤グループ (ステージⅡ~Ⅳ)   |
| 対象授業                  | 国語 「これはこ」  |
| 授業の目標                 | ・ 教師の指示を聞いて、行動したり、応答したりすることができる。<br>・ 適当なイラストや文字を当てはめて、文を作ることができる。   |
| 必要な情報活用能力             | ログイン、Classroom、スライド、画面上のタッチ操作、電子黒板   |
| 授業の内容                 | 1. 授業の目標を決める【個別】<br>2. PPのコミュニケーションシートを使って、仲間とコミュニケーションをとる【協働】☆表現<br>3. 絵本の読み聞かせを聞く【個別】<br>4. 読み聞かせの内容の振り返りをする【個別・一斉】☆表現<br>5. 物の名前の書き取りをする【個別】<br>6. 個別課題をする【個別】<br>7. 学習の振り返りをする【個別】 |
| 目標達成のためICT活用が有効だったところ | ・ 適当なイラストや文を枠に当てはめることで、文を作ることができる。<br>・ 文字が書けなくても、イラストを用いて文を作ることができる。<br>・ 電子黒板を用いて、同じ画面を見ながら、答え合わせをすることができる。  |

### 【授業・活用実践シート】

また、本校の研究において「千歳市立北進小中学校 情報活用能力の体系表」を取りまとめました。文部科学省や北海道教育委員会から出されている「情報活用能力の体系表」を参考に、これまでの授業実践を踏まえて取りまとめ、今後の授業づくりの指標として活用していきます。次年度以降も実践事例を参考に改定していく予定になっています。



【ICT活用実践事例】

## 3 成果と課題

本校の研究を通して、全教員がICTを活用することにより、「学習の振り返りにおける言語活動」や「共同編集を活用した協働的な学び」など、児童生徒の自己表現する場面を意図的に設定する授業改善を図ることができました。今後は、資質・能力を育成するための、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業の改善、充実を図るため、校内におけるICTを活用した教材の共有などを推進する必要があります。

障がいの状態が多様な児童生徒が在籍する本校において、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けたICTの効果的な活用について、今後も検証を続けていきたいと考えています。

### 講評「ICT活用の意図を明確にした授業改善を」

北海道立特別支援教育センター教育課主査 音羽孝文

千歳市立北進小中学校には、多様な実態の児童生徒が共に学ぶための特色ある取組が見られます。言語獲得前の児童生徒が、興味・関心の高い教材を介してやりとりの基礎を習得する指導から、就労や社会参加を見据え、状況に応じた会話や振る舞いを身に付ける指導まで、実態に応じた目標と手立てを段階別に整理し、ねらいや場面に応じてICTを効果的に活用する点や、「学習の振り返りにおける言語活動」、「共同編集を活用した協働的な学び」の成果等は、特別支援学級での指導の充実に向け大変参考になります。ICT活用の意図や場面等について、児童生徒の姿を通じた検証を続けることにより、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が一層進展することを期待しています。

## 〈特集〉

# 道内の特別支援学校におけるICT活用実践

## 北海道室蘭養護学校の取組 (校長 星野 健史)

### はじめに

本校は、昭和54年に開校した「平取養護学校白鳥学園分校」を前身とし、平成3年に開校した知的障がいのある児童生徒を対象とした特別支援学校です。

現在は、知的障がいのほか、視覚障がい、聴覚障がい、肢体不自由・病弱など複数の障がいを合わせ有する児童生徒が在籍しており、医療的ケアの必要な児童生徒も在籍しています。

知的障がいのある児童生徒の学習上の特性等を踏まえ、個別のニーズに応じた内容と多様な集団での学習を通して、将来の社会生活や地域活動に参加する上で必要となる力や望ましい生活習慣を養うための教育を行っています。

### 1 研究の取組

本校では、令和3年度から「ICTを活用した効果的な学習活動の充実を目指して」を研究主題として、3か年計画で校内研究に取り組んでいます。令和3年度の校内研究では、教員の指導力の向上を重点として、ICTを積極的に取り入れている自校の教員を講師に、ICTの操作方法や実践例を交流する校内研修を行いました。実施した各研修とアンケート結果から、「教員のICTの活用方法への知識や理解の深まり」、「教員の意識の向上」、「ICTを使う場面の増加」の3点が成果として確認できました。



【実践交流会の様子】

年間を通じた取組として、研究部だよりを毎月発行し、実践事例の紹介を行っています。研究部だよりは、本校 Web ページに掲載し、保護者の方や関係機関等へ情報提供しています。

[http://www.muroranyougo.hokkaido-c.ed.jp/?page\\_id=154](http://www.muroranyougo.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=154)



2年次である令和4年度は、「全教員のICT活用を促進する」、「実践事例を蓄積する」、「児童生徒が主体となり、自らICTを活用できる授業づくりを行う」ことを重点として、「『主体的・対話的で深い学び』へとつながる授業づくりシステムの構築」を目指し、校内研究に取り組んでいます。

また、本校の研究に係り、北海道立特別支援教育センターから講師を招き、「中間報告会での助言」、「1月校内研究での講話」及び「3月研究のまとめでの助言」と年間を通じて連携を図りながら研究を推進しています。



【学校と北海道立特別支援教育センターをオンラインでつないだ研修会の様子】

## 2 ICTを活用した授業づくり・授業改善

「これまでの我が国の教育実践と最先端のICTのベストミックスを図ることにより、教師・児童生徒の力を最大限に引き出す」というGIGAスクール構想の理念に基づき、「従来の支援とICTの効果的な融合」をポイントに授業づくりを行いたいと考え、「ICT活用授業構想シート」を作成しました。

授業者間で本シートを活用しながら授業の打合せをすることで、従来の支援にICTによる支援を組み合わせることをねらいとしています。

【ICT活用授業構想シート】

学習の視点から見た情報活用能力一覧（参考例）

北海道教育委員会では、文部科学省が作成した「情報活用能力の体系表例」により、小学校から高等学校までの各学校段階において、育成が求められる資質・能力の具体例を参考に作成しています。

[www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp.xlsx](http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp.xlsx) (live.com)



ICT活用実践事例については、学部毎の研究グループによる検討を重ね、令和4年（2022年）12月に全校で研修会を実施し、各研究グループがICT活用に係る実践の発表を行いました。

指導実践の成果や課題、授業改善の経緯及び児童生徒の変容についてまとめた資料は、年度末に実施する意見交流の際の資料として活用しています。

実践事例提供協力者

- ・小学部教諭 宮崎 満智子、高辻 賢司
- ・中学部教諭 駒澤 綾子、加渡 元章
- ・高等部教諭 渡部 佳穂里、池田 里奈

URL : [http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/?page\\_id=1075](http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=1075)

【ICT活用実践事例】

## 3 成果と課題

児童生徒が主体的にICTを活用することを目的とした授業づくりに向けて継続的に評価・改善し、マネジメントサイクルを実施することができました。児童生徒の理解や関心の程度に応じた学びを模索し、児童生徒が主体的にICTを活用する姿勢や習慣を育み、経験を拡大できたことが大きな成果です。

今後は、情報活用能力の育成はもとより、教科指導の効果を高める視点を共有しながら授業目標の達成に向け、主体的・対話的で深い学びを推進する授業改善を図る必要があります。児童生徒が協働的に学び、思考力、判断力、表現力等を育成することができるICTを活用した授業づくりが課題です。

不易と流行を踏まえ、本校の教育活動の充実のために、今後とも北海道立特別支援教育センターをはじめとする関係機関との連携を通して研究を推進していきたいと考えています。

**講評「学びの質を高める授業改善」**

北海道立特別支援教育センター教育課主査 音羽 孝文

室蘭養護学校の実践は、校内において活発に実践交流会を企画し、全教員によるICT活用の充実を図るとともに、Webページで効果的な実践を広く公開するなど、本道の特別支援学校におけるICT活用を牽引するすばらしい取組です。主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善においては、育成を目指す資質・能力を明確にし、児童生徒が各教科等の「見方・考え方」を働かせられるよう、単元の計画を適切に立てることが、学びの質を一層高める授業改善につながっていきます。

次年度の授業改善の取組が、児童生徒の学びの充実につながるとともに、成果を広く発信していただくことを期待します。

## 〈特集〉

# 令和3年度 筑波大学特別支援教育連携推進グループ 「現職教員研修『専門性向上プログラム』」報告について



北海道小樽高等支援学校教諭 小 谷 明日香

## はじめに

私は、これまでに、本校を含め知的障がい特別支援学校（高等部単置校）2校で勤務してきました。教員経験が10年を超え、これまでに出会った様々な生徒たちと向き合う中で、「社会で自立した生活を送るための力を育成する高等支援学校の在り方」について考えを深めたいと思うようになりました。そこで、道外の教育活動等について幅広く学び、知見を深めるために、「特別支援教育担当教員長期派遣制度」による、「筑波大学特別支援教育連携推進グループ」（以下「連携推進グループ」という。）での一年間の研修に取り組みました。

「現職教員研修受講のきっかけ」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/YY-PSWuaWxg>



## 1 現職教員研修について

筑波大学には、視覚特別支援学校（視覚障がい）、聴覚特別支援学校（聴覚障がい）、大塚特別支援学校（知的障がい）、桐が丘特別支援学校（肢体不自由）、久里浜特別支援学校（知的障がいを伴う自閉症）の5つの附属特別支援学校があります。

「筑波大学特別支援教育連携推進グループ現職教員研修」は、これら5つの附属特別支援学校及び筑波大学人間系障害科学域等が連携して行う研修プログラムです。本研修プログラムには、「専門性向上研修」と「指導力向上研修」の2つのコースがあり、1か月～1年間で研修期間が設定されています。私が研修生として取り組んだ研修活動の内容は次のとおりです。

### (1) 研修の概要

「生徒が学習意欲をもって主体的に学ぶ力」の育成に向けて、「高等支援学校における自立活動を基盤とした職業教育の考察」とテーマを設定しました。テーマに迫るため「筑波大学附属特別支援学校における実践研修」、「講義・演習の受講」、「自主テーマによる研修、研究」等に取り組みました。

### (2) 長期実践実習

筑波大学附属久里浜特別支援学校（以下「久里浜特別支援学校」という。）と筑波大学附属大塚特別支援学校（以下「大塚特別支援学校」という。）において、約3か月ずつの実践実習を行いました。久里浜特別支援学校では小学部第4学年、大塚特別支援学校では高等部第2学年に所属し、毎日、児童生徒と関わり、授業を行いました。

### (3) 講義・演習等の受講

筑波大学教員による大学講義の聴講や筑波大学附属学校長による講話、連携推進グループ教員による講義・演習を受けました。また、久里浜特別支援学校での実践実習中には、国立特別支援教育総合研究所の研修講義の聴講や施設を見学しました。

### (4) 学校見学

コロナ禍で実施が難しい学校もありましたが、知的障がい以外の附属特別支援学校の見学を行いました。

### (5) 自主研修

コロナ禍の影響を受けながらも、都立特別支援学校をはじめ、障がい者支援施設、国立職業リハビリテーションセンター、都内障害者就労・生活支援センター等の訪問や、就労支援セミナーの受講など、関東圏の学校や障がい者就労支援事業所での自主研修を行いました。

### (6) テーマ研究

各研修活動での学びから、研究テーマを「高等支援学校における生徒理解の在り方に関する研究～社会の中で安定して生きる生徒の育成を目指して～」と決め、一年間の研修で得た知見を報告書にまとめました。

「テーマ研究」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/-5ham84UQ8A>



## 2 令和3年度 筑波大学特別支援教育連携推進グループ「現職教員研修『専門性向上プログラム』」の取組の成果と課題について

私は、「生徒が学習意欲をもって主体的に学ぶ力」の育成を図るために必要な知見を得ることを目的に、様々な研修を行いました。

久里浜特別支援学校の実践実習では、幼稚部や小学部における教育活動などにおいて幼児児童と時間を掛けて関わることや、幼児児童を理解するための教員間の話し合いを十分に行うことなどを経験し、幼児児童の成長・発達や一人一人に合わせた指導・支援の大切さについて、理解を深めました。

大塚特別支援学校の実践実習では、生徒が意欲を持って主体的に活動するための学習内容や指導方法の工夫、生徒が将来を見据えて学習に取り組むための指導方法について学びました。

2校での実践実習によって、児童生徒が意欲的に主体的に活動するためには、児童生徒に対して変容を求めるのではなく、まずは教師が変容する必要があると感じ、生徒理解の視点に着目したテーマ研究を行うこととしました。

また、講義・演習や筑波大学附属特別支援学校の見学、実践研究会への参加などを通して、教師がそれぞれの障がいについて医学的な視点も含めて広く理解し、児童生徒一人一人の障がい特性に応じた指導・支援を行うことの重要性を学びました。高等学校で学ぶ聴覚障がいや視覚障がいのある高校生においても、高等支援学校の生徒と共通する難しさや課題などがあることも知り、知的障がいや発達障がいだけでなく、広い視野で情報を集めることが、高等支援学校におけるよりよい教育活動につながると感じました。(図1)

| 本研修で得た知見に基づき、新たな生徒理解の視点を明らかにした  |   |
|---|---|
| 生徒理解の視点   | 問題のカテゴリー  |
| <b>【9歳の壁】</b> ～発達段階に応じた関わり～<br>・具体的思考から抽象的思考への転換<br>・話し言葉から書き言葉への転換 など              | 自己中心的な思考や行動   ことばの理解の不足<br>意見を調整することの難しさ   極度の承認欲<br>見通しやイメージをもつことの難しさ<br>自己調整力の低さ   自分を正当化する傾向 |
| <b>【信頼関係の構築】</b> ～主体的な学びにつながる～<br>・受容的、共感的な姿勢で生徒と関わること<br>・生徒との関わりに時間を掛けること など      | 自己調整力の低さ   極度の承認欲<br>粘り強く取り組むことの難しさ<br>主体性の低さ   |
| <b>【発達障害の特性】</b> ～障害特性に応じた関わり～<br>・個々の認知特性や行動特性を理解すること<br>・客観的なデータの活用 など            | 見通しやイメージをもつことの難しさ<br>状況の把握と対応の難しさ   |
| <b>【医療の視点】</b> ～体調面・情緒面の理解と対応～<br>・過剰適応の可能性を考慮すること<br>・二次的な症状の可能性を考慮すること など         | 自己調整力の低さ   物事に対する不安の強さ<br>粘り強く取り組むことの難しさ  |
| <b>【子どもを取り巻く世界】</b> ～生活環境の理解～<br>・インターネットが普及した社会での子どもの発達<br>・仮想と現実の2つの世界があるということ など | 状況の把握と対応の難しさ   極度の承認欲<br>物事に対する不安の強さ<br>ことばの理解の不足   |

【図1：「本研修で得た知見に基づく、新たな生徒理解の視点」】

テーマ研究では、高等支援学校の生徒の課題となる実態を整理して考察し、それらにアプローチするためには、より深い生徒理解が必要と考えました。研修で得た学びを踏まえ、「発達段階に応じた関わり～9歳の壁～」「信頼関係の構築」「発達障害の特性」「医療の視点」「子どもを取り巻く世界」に関する5つの新たな生徒理解の視点と指導方法についてまとめました。

新たな生徒理解の視点を踏まえた指導方法を明らかにした

<例> 家庭科「快適な住生活」(附属大塚特別支援学校)

【9歳の壁】

～指導方法～

- ・体験的な学習を設定する
- ・具体物进行操作する活動を設定する
- ・別の班の活動を見る学習を設定する
- ・生徒と活動を共にしながら言葉を掛ける

～学ぶ生徒の姿～

- ・主体的に問題解決に取り組んだ
- ・互いの意見を調整しながら取り組めた
- ・仲間の姿からより良い方法に気付いた
- ・実感を伴って言葉を使った

教科ごとの指導方法の工夫

具体的思考の繰り返し

【図2：「新たな生徒理解の視点を踏まえた指導方法」】

知的障がい特別支援学校(高等部単置校)での勤務経験しかない私にとって、「児童生徒のやりたいことは、発達の要求であること」や、「興味関心を捉えて関わるのが、発達の状況に合わせた指導であり、それらを積み重ねることが発達を促す上で重要であること」など、新しい気付きと学びにあふれる研修となりましたが、同時に自身の知識不足や視野の狭さを実感することが多々ありました。

本研修での学びを今後の実践にいかす方法の一つとして、児童生徒理解の視点と指導方法の変容を目指すための研究をまとめました。

これからも知見の整理と実践への活用に取り組み、よりよい指導に結び付けられるよう、研鑽を積んでいきたいと思ひます。(図2)

「新たな生徒理解の視点」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/Mb6z0WFzVos>



### 3 成果と課題を踏まえた今後の指導に向けて

本研修後、本校では特別支援教育コーディネーターとして、教育相談業務を担当しています。様々な生徒との関わりから、生徒たちは必死に社会の変化へ適応しようと試行錯誤する中で、不安を抱え、葛藤しながら学校生活を送っていると感じています。私たち教員は生徒たちが社会の中で主体的に自己実現を図ることができるよう、十分な生徒理解に基づく丁寧な教育を実践していくことが大切であると考えます。

また、児童生徒の教育的ニーズや保護者の願いに対して適切な相談・支援を行うためには、学校だけでなく関係機関がチームとなって連携を図り、それぞれの機能や役割を発揮することが重要であると考えます。その際には、個別の教育支援計画を活用し、関係者が児童生徒の特性等を共有しながら、本人や保護者に寄り添った指導・支援の在り方を検討することが大切です。その結果、児童生徒と教師に心の余裕をもって向き合える環境が整えられるのではないかと考えています。

「研修後の小樽高等支援学校における実践」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/JI05Jl7H0js>



「研修の魅力」についてのインタビュー動画はこちら

URL <https://youtu.be/UwM8pqisbhU>



講評「教育の専門家として実践的指導力や専門性の向上に主体的に取り組むために」

北海道立特別支援教育センター教育課長 三瓶 聡

令和3年11月の中教審による審議まとめ「『令和の日本型学校教育』を担う新しい教師の学びの姿の実現に向けて」では、新しい教師の学びの姿として、①「変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという『主体的な姿勢』」、②「求められる知識技能が変わっていくことを意識した『継続的な学び』」、③「新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した『個別最適な学び』」、④「他者との対話や振り返りの機会を確保した『協働的な学び』」の4つが示されました。

小谷先生の研修は、自校に在籍する生徒の障がいや発達の状況などを踏まえ、「学習意欲を高め、主体的に学ぶ生徒を育むためには」という探求心に基づき、「そのために必要な指導は何か」という、これまでの実践や経験に加え、新たな知識技能を得るための「継続的な学び」に取り組むなど、「現職教員研修『専門性向上プログラム』」の機会を通して「個別最適な学び」を体現したものであると考えます。

本報告では、知的障がい特別支援学校（高等部単置校）における生徒理解の深化を図り、指導の充実に結び付けるための「新たな生徒理解の視点」及び「新たな生徒理解の視点を踏まえた指導方法」について取り組まれた研究の結果が掲載されています。

小谷先生には、ぜひ、今回の研修で得られた知見を校内外の先生方との対話によってさらに深め、実践に結び付けるなど、「協働的な学び」につなげていただけることを期待します。

また、多くの先生方には、本報告を御覧いただき、日々関わっている児童生徒への理解を深め、指導や支援に生かすための参考にしていただきたいと思います。

高度な専門職である教員には、児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な指導や支援の充実に図るために、各キャリアステージに応じた必要な研修を受講するなど、絶えず学び続ける存在であることが求められています。

「現職教員研修『専門性向上プログラム』」は、教師自らが主体的に学び続ける姿の具体的な取組です。

各学校の先生方におかれましては、本道の特別支援教育の充実に向けた自己研鑽の選択肢の一つとして、本研修制度を活用いただきたいと思います。

## 編集後記

「特別支援教育ほっかいどう」第28号（通巻第72号）では、道内の特別支援教育における先進的な取組や最新の実践事例として、管理職を対象とした「働き方改革」の取組、特別支援学級及び通級による指導を担当する教諭及び知的障がいがある児童生徒の指導を担当する教諭を対象とした「ICT活用」の取組、特別支援学校において、ミドルリーダーとしての活躍が期待される教諭を対象とした「現職教員研修」の取組を紹介しました。

本号の発行を通して、道内の特別支援教育のより一層の理解と推進に資することができれば幸いです。

当センターといたしましては、皆様方の御示唆を頂きながら、北海道の特別支援教育の充実を目指し、様々な活動を展開してまいりますので、今後ともよろしくお願いたします。

最後になりましたが、御執筆いただきました皆様や取材に御協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

## 「特別支援教育ほっかいどう」第28号（通巻第72号）

発行：令和5年（2023年）3月

編集：北海道立特別支援教育センター

北海道札幌市中央区円山西町2丁目1番1号

T E L 011-612-6211（代表） F A X 011-612-6213

E-mail tokucen@hokkaido-c.ed.jp

U R L <http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp>

Twitter [https://twitter.com/pref\\_tokucen](https://twitter.com/pref_tokucen)

YouTube <https://www.youtube.com/channel/UC7ohsCTaA7LKcBpMMw4UPIA>



当センター  
Webページ



公式  
Twitter



特別支援教育  
YouTubeチャンネル

発行者：北海道立特別支援教育センター所長 今井章文

# 特別支援教育におけるICT活用実践事例集

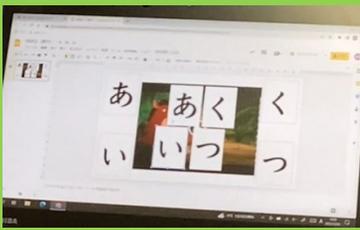
本道の小・中学校特別支援学級及び通級による指導におけるICT活用実践事例を紹介します。  
今回は、千歳市立北進小中学校の実践です。

二次元コードを読み込み、それぞれの授業に取り組んだ千歳市立北進小中学校の先生による教材紹介の動画をご覧ください。



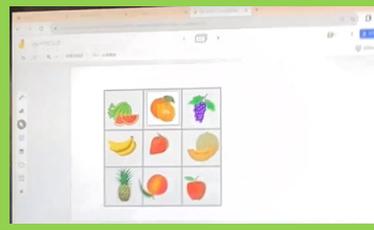
## ひらがなのマッピング

国語科 小学校第1・2学年  
知的障がい特別支援学級



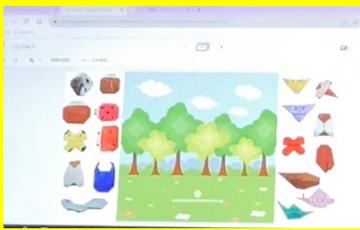
## ビンゴをしよう

特別活動 小学校第6学年  
知的障がい特別支援学級



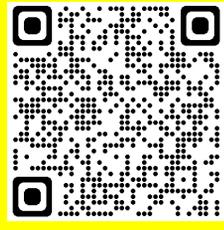
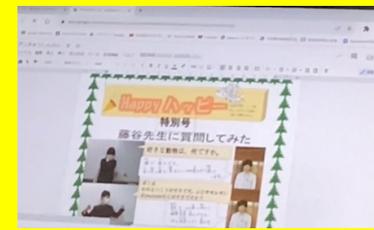
## 単元のまとめの工夫

美術科 中学校第1～3学年  
知的障がい特別支援学級



## 学級通信を作ろう

生活単元学習 中学校第1・2学年  
知的障がい特別支援学級



## 学習の振り返り

自立活動 小学校第5学年  
通級による指導（言語）



## 気持ちの言語化

自立活動 小学校第3学年  
通級による指導（情緒）



# 特別支援教育におけるICT活用実践事例集

本道の特別支援学校におけるICT活用実践事例を紹介  
します。

今回は、北海道室蘭養護学校の実践です。

二次元コードを読み込み、それぞれの授業に取り組んだ北海道  
室蘭養護学校の先生による説明動画をご覧ください。

※説明動画では、「QRコード」という言葉を使っている場合があります。  
※「QRコード」は株式会社デンソーウェブの登録商標です。



## 【事例①】

### iPadのカメラ機能を活用した授業実践

(生活単元学習)  
小学部第3学年



#### 【ICT活用の成果】

日用品や学習教材など生活  
の中にある「二次元コード」  
に気付くとともに、校外学習  
等において主体的に活用する  
ことができた。



## 【事例②】

### iPadとプロジェクター・スクリーンを活用 した授業実践 (遊びの学習)

小学部第2～6学年 (重複障がい)



#### 【ICT活用の成果】

児童の実態に応じてタッチ  
画面の操作やスイッチ教材を  
用いることで、手指の動き  
(タップやスワイプ等)に主  
体的な動きが見られた。



## 【事例③】

### 動画撮影やGoogleスプレッドシートを活用 した授業実践 (作業学習)

中学部第1～3学年



#### 【ICT活用の成果】

デジタル作業日誌を試行的  
に取り入れた障がいの程度に  
よる支援の充実や情報活用能  
力の向上を図ることができた。



## 【事例④】

### Google Jamboard等の教材を活用した 授業実践 (各教科等)

中学部第3学年



#### 【ICT活用の成果】

教育活動全般においてICT  
機器を活用することで、デ  
ジタルとアナログを適切に組  
み合わせた教育の質の向上を  
図ることができた。



## 【事例⑤】

### Google Jamboardを活用した意見交流

(生活単元学習)  
高等部第2学年



#### 【ICT活用の成果】

共同編集機能を活用するこ  
とで、発言する機会を確保す  
るとともに発言内容に賛同し  
たり、別の意見を伝えたりす  
るなど、言語による交流の充  
実を図ることができた。



## 【事例⑥】

### Googleスライドを活用した授業実践

(生活単元学習・LHR)  
高等部第3学年



#### 【ICT活用の成果】

クラウド内の共有ドライブ  
を活用したコメントのやりと  
りをする中で、他者を承認  
する際の言葉を推敲する学習  
に取り組むことができた。

